無宿人御子神の太吉（中）

笹沢左保

講談社

無宿人御子神の丈吉（中）
昭和四十七年八月十四日第一刷
著者＝笹沢左保
発行者＝野間省一
発行所＝株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一大代表　振替東京三九三〇
印刷所＝豊国印刷株式会社
製本所＝黒柳製本株式会社
定価＝四四〇円
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
©笹沢左保　一九七二年

0093-300843-2253（0）　（文2）

目次

第六話　土塊の音が響いた　五
第七話　夕闇に女郎は死んだ　六一
第八話　川風に過去は流れた　一二九
第九話　黄昏に閃光が翔んだ　一八五

絵　岩田専太郎
装幀　山内　暲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第六話　土塊（つちくれ）の音が響いた

1

宇都宮から、南東への道にはいった。この道は筑波山麓を迂回して、霞ケ浦の北にある府中で水戸街道と交差するのである。宇都宮から府中まで十八里、約七十二キロの鄙びた街道であった。

農村地帯を貫く脇街道であり、旅人の姿は疎らであった。宿場らしい宿場となると、真岡、筑波、小幡というところぐらいのものだった。街道筋に人家がなく、野原や雑木林ばかりが目についた。

その渡世人は、街道をかなり足早に歩いていた。宇都宮を立ったのが今朝の明け六ツであり、いまはもう四里半以上を歩いて真岡のすぐ手前まで来ていた。時刻は五ツ半、午前九時であった。

渡世人は、長身であった。三十前の年に見えたが、ひどく荒んだ顔をしている。整った顔立ちで、美男には違いない。だが、いかにも印象が暗く、冷ややかな目つきをしているのであった。

痩せている。そのせいか、陰気な感じに鋭さが加えられていた。古ぼけた三度笠を目深にか

ぶり、前屈みになって歩く。野原を渡って来る風が、薄汚れた道中合羽の裾を舞い上げた。鉄環と鉄鐺で鞘を固めた長脇差が、重そうに揺れている。変わっているのは、女の緋色のシゴキ帯を腰に巻きつけている点であった。そのシゴキ帯も、雨風や埃に晒されて黒っぽく変色していた。

弘化三年の春三月、生温い南風がかなり強く吹いていた。青い空に広がった淡い雲が、目に見える早さで北西へ移動していた。日射しは柔らかく、渡世人のあまり濃くない影を路上に落していた。

真岡にはいると、俄かに人家が多くなる。旅籠屋、居酒屋のほかに各種の商家が軒を並べている。宿場らしい雰囲気だった。旅人の郷愁をそそるような、ささやかな生活の匂いが嗅げるのであった。

ここは、真岡木綿の産地であった。また真岡には代官所の、いわゆる御陣屋がある。そうした点でも、真岡はこの地方での中心地になっていた。しかし、渡世人は顔を上げようともせずに、真岡宿を真直ぐ通り抜けた。何事に対しても無関心というような、渡世人の態度であった。

真岡をすぎると、二里で小栗である。小栗の先の真壁川が、下野と常陸の国境になっている。現在とは違っているが、栃木県と茨城県の境界線であった。渡世人は、小栗の手前の四ツ辻のところで足をとめた。

いや、足をとめさせられたのであった。その四ツ辻を右へ行けば戸部村、左へはいると八幡神社があるらしい。四ツ辻の右側の一角に、道祖神の祠があった。その祠の横に、十人近い男

が屯ろしていたのである。

「待ちやがれ！」

飛び出して来た男が、渡世人の前に立ち塞がってそう怒鳴った。遊び人ふうの男に見えるが、右手に十手を握っていた。一目で、道案内だとわかった。道案内というのは、特殊な職業の呼称であった。

江戸の警察機構は主として、町奉行である。江戸を除いた関東地方は、関東取締出役という役職の者が犯罪を取締まっていた。町奉行の捜査官である町方同心が、手先として使っているのは岡っ引であった。

関東取締出役の手先を勤めているのが、この道案内なのである。つまり道案内とは、江戸における岡っ引なのであった。いわば密告役だから、まともな人間は道案内をやりたがらない。

それに、悪の世界に通じていないと、道案内としては役立たずである。それで公然的に、その土地の遊び人などが道案内を勤めるようになる。貸元やちょいとした顔の渡世人が、道案内として十手捕縄を預かるのを、二足の草鞋をはくというのであった。

その道案内がいるからには、関東取締出役もいるはずだった。渡世人は三度笠の下で、目を右へ走らせた。果して男たちの中に、関東取締出役の姿があった。ひとりだけ、馬に跨っている。

陣笠を、かぶっていた。股引き手甲脚絆、袴をはき腰に大刀を帯びている。ぶっ裂き羽織を着て、懐中から紫色の房ヒモがついた十手を覗かせている。馬の前後に、小者と雇い足軽を従えていた。

その左右に、六人ほどの武士が立っていた。二人が羽織に、袴をつけている。残り四人は袴だけで、羽織は着ていない。二人が代官陣屋の手付か手代で、あとの四人は単に侍と呼ばれている下級武士に違いなかった。

「真岡の御陣屋の者だが、ものを尋ねるぞ」

代官陣屋の手付と思われる武士が、渡世人のほうへ近づいて来た。あとの五人も、渡世人を押し包むように取り囲んだ。

「へい」

渡世人は、頭を低くした。

「かぶり物を取れ！」

手付が、怒鳴りつけた。相手は、渡世人である。代官所の者だけに、最初から犯罪者扱いにするのだった。渡世人は顎ヒモを解き、三度笠をはずした。

「名を申せ」

手付が、渡世人の顔を見据えた。

「丈吉と申しやす」

渡世人は、低い声で答えた。

「生国は？」

「房州の御子神でございやす」

「房州無宿か」

「へい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「いずこから来て、いずこへ参る」
「信州から参りやした。これから、潮来まで足をのばすつもりでおりやす」
「何か、目当てがあっての道中か」
「へい。人を捜しておりやす」
「腰に巻いているそのシゴキ帯は、いったい何のつもりだ」
「死んだ女房の、形見でございやす」
「死んだ女房の形見とは、うまい言い訳を思いついたものだな」
手付が、意地の悪そうな薄ら笑いを浮かべた。
「別に、言い訳ではございやせん」
御子神の丈吉が、表情のない顔で言った。
「黙れ！　偽りばかりを申し立てて、それで通るとでも思っておるのか！」
手付が、大声を張り上げた。
「本当のことを、申し上げておりやすんで……」
御子神の丈吉は、驚きもしないし顔色も変えなかった。
「面体を隠し、先を急いでおったではないか！」
ここにいる代官所の連中は、三度笠を目深にかぶり前屈みになって歩く丈吉の姿を見て、顔を隠し矢鱈と先を急いでいるものと解釈したらしい。
「それに、その赤いシゴキ帯が、何よりの証拠だ！」
手付が、丈吉の腰に腕をのばした。それを丈吉の左手が、素早く掴んで押し戻すようにし

た。丈吉の左手の小指と薬指が、根元から切断されて無気味な傷跡が残っていた。あとの三本の指の爪が、鋭い刃物のように一センチほどのびている。

「手向かうつもりか！」

手付が荒々しく、丈吉の左手を振り払った。同時に、四人の武士が三方から、丈吉を押さえ込んだ。何が何だか、よくわからなかった。赤シゴキ帯が証拠だというその意味も、まったく見当がつかない。

しかし、何か重大な事件が起ったことに、間違いはなかった。そうでなければ、代官陣屋の役人たちが四ツ辻で張っていたりするはずはなかった。しかも、それに関東取締出役までが、加わっているのだった。

「御陣屋へ、引っ立てろ」

手付が、下級武士たちに命じた。下級武士たちは、丈吉を包囲したままで歩き出した。そのあとに、手付、道案内、小者、馬上の関東取締出役、雇い足軽と続いた。丈吉は、無抵抗であった。抵抗できる相手では、なかったのである。

幕府の直轄の領地と農民が全国にあって、それを支配するのが代官ということになる。全国で四十人以上、関東地方には十人の代官がいた。その支配地は五万石が規準であったが、その二倍や三倍の支配地を持つ代官もいた。

関東地方の代官は、十万石以上の支配地を持つ者ばかりであった。代官所の雇い人は、手付手代と呼ばれる者が主体になっていた。その最上位にある者が、元締めである。この元締め以下、手付、手代、書役、侍、勝手賄い、足軽、中間（ちゅうげん）などがいた。

全部で、六人ほどの人数である。だが、それらがすべて、一つの代官所に集まっていたわけではない。普通、代官所という総称で呼ばれている任地の屋敷は、正確に言えば陣屋であった。また、そのほかにも出張所があって、それを出張陣屋と称していた。

江戸にも、代官の屋敷があった。これを、在府と言った。この三ヵ所に、六十人ほどの雇い人が分散していたのである。関東地方の代官は、殆ど江戸の在府を離れなかった。従って関東地方に限り、代官所へ乗り込んで悪代官を斬ったという話は成り立たないのであった。

なぜ、代官が任地へ赴かないのか。遠国であればともかく、関東地方の代官たちは江戸にいたほうが便利だからである。何事も江戸中心主義で、任地にいたのでは最終的な決着をつけられなかったのだ。

代官の仕事は、地方と公事方の二通りがある。地方は、一般民政と年貢米の取り立てである。公事方は、警察権の行使と裁判だった。しかし、代官の警察力など、微々たるものであった。

コソドロとか、博奕を取締まるのが精々である。大きな騒ぎが起ったときは、近くの幕府の譜代大名に出兵を依頼するほかはなかった。また、本格的な犯罪捜査は、関東取締出役に任せてあった。この取締出役は、関東地方の諸代官所の手付や手代の中から、優秀な者を選んで任命してあるのだった。

裁判にしても、代官の権限は小さな事件にしか及ばなかった。代官が裁けるのは、博奕三度以下までに限られていた。三度以上の博奕となると、遠島の罪になる。遠島や死刑に相当する罪は、代官の裁判権には無関係だったのだ。

そうした罪人は、江戸へ送らなければならない。代官を支配する勘定奉行に、罪状や自白の書類を添えて差し出す。あとは勘定奉行の裁断に、一任するのであった。つまり代官が任地にいて、ひとり権力を振り回すという必要もなかったのである。

それでも天領においては、代官陣屋の連中が絶大な威力を発揮できたのであった。特に農民や無宿人に対しては、扱いがひどかった。丈吉の場合も、否応なしに真岡の代官陣屋へ連行されたのである。

代官不在の陣屋だから、屋敷ではなく完全な代官役所の感じだった。町奉行所よりは小規模だが、取調べ用の白洲、牢屋、責め道具などが完備していた。丈吉はいきなり高手小手に縛り上げられて、白洲に引き据えられたのであった。

しかも、まず拷問から始められたのである。

2

中央に関東取締出役が腰を据え、その両側に二人の手付が立っていた。丈吉の周囲には、三人の下級武士がいる。その三人が責め役、つまり拷問の係であった。最初は、打ち問いから始まった。

江戸であれば、こうした白洲で拷問にかけたりはしなかった。拷問は『牢問い』と言って、すべて牢屋敷の専用の場所で行われた。しかし、地方の代官所などには、そうした特殊な設備がなかったのである。

拷問の手段や種類も、ひどかった。公式な拷問としては、あまりにも非人道的すぎる手段に

限り、江戸中期までに廃止されていた。ところが、代官所の拷問となると非公式に、残酷な拷問を持ち出して来るのだった。それもまた、代官所の独特な権力を物語っているのであった。

打ち問いは、太い竹に縄を巻いたもので撲りつけるのであった。これは、皮膚に激痛を与えた。両側から二人が交互に、竹竿を振りおろす。三十回ずつ繰り返すと、撲りつけるほうが汗を流し呼吸を乱していた。

丈吉の背中には、黒々と血が滲み出ていた。着物が破れる前に、その下で皮膚が裂けてしまうのだった。丈吉は、音を上げなかった。激痛に意識が朦朧となっていたが、依然として声を洩らさずにいた。

「さっさと、申し上げろ！」

手付のひとりが、前へ出て来た。

「何も、申し上げることがございませんので……」

丈吉は半眼に見開いた目で、近づいて来た手付を振り仰いだ。その顔に、脂汗が噴き出していた。

「まだ、強情を張るのか」

「いってえ、あっしは何のお疑いをかけられているんでございましょう」

「何もかも承知しておるくせに、お上を愚弄するつもりか！」

「とんでもございません」

「戸部村の不穏な動きに、関わり合いを持たぬと申すのか」

「戸部村……？　あっしは、旅の者にございます。この土地のことは、何も知っちゃあおりやせ

ん」
「黙れ！　百姓どもの一揆に、無宿人や非人が加わるということは、もはや定石となっておるのだ」
「百姓一揆……？」
「戸部村の百姓ざっと二百名が、寄り集まって当御陣屋へ押しかけるのどうのと、よからぬ談合を繰り返していることはわかっておる。ただ百姓どもを煽動している首謀者の正体が、明らかになっていないだけだ」
「あっしは通りがかりの者で、そんなことに関わりはございません」
「そうは言わせぬ。昨夜、何者かが御陣屋に文を投げ込み、首謀者の正体を密かに通報して参ったのだ。それによると、首謀者は戸部村の者ではなく、赤いシゴキ帯を締めておるとのことだったぞ！」
　手付はそう言って、丈吉の胸を蹴りつけた。丈吉は、のけぞった。
「何もかも、申し上げろ！」
　手付が、丈吉の頬を張った。
「知らねえことは、申し上げられやせん」
　丈吉は、目を伏せた。
「このような強か者には、並みの責め方では通用せぬでしょう。一つ、糞問いにしてみては、いかがですかな」
　関東取締出役が、冷ややかな笑いを浮かべた。『糞問い』は拷問の極限とされているほど残

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com